



©JBFA/H.Wanibe

巻頭特別企画

ブラインドサッカーの未来 「視覚障がい者と健常者の 混ざり合う社会は実現できる」

TOKYO FA's Pick Up

中田康人(東京都サッカー協会技術委員長)
「東京のサッカーをつなぎ、強くする」

専門委員会

「コロナ禍で何ができるか」
技術／審判／キッズ／フットサル

MATCH REPORT

第99回全国高校サッカー選手権大会
天皇杯JFA第100回全日本サッカー選手権大会

連盟NEWS拡大版

社会人／大学／シニア／地区
自治体／専門学校／高体連／クラブユース
中体連／少年／女子／フットサル

「Tokyo FA News」は、東京都サッカー協会発行の広報誌です。

年2回、東京都のサッカーにまつわる情報を発行しています。

(2020年度は新型コロナウイルスの影響により各種イベントが中止・延期となったため、1回のみの発行としました)

TOKYO FA NEWS 2021
Tokyo Football Association

Vol. 33

私たちは 東京都サッカー協会を 応援しています。

初声町和田長浜太陽光発電設備



神奈川県初声町和田(和田長浜海岸側)
2021年4月 引渡予定
取得名義:株式会社スカイ・ランド
(日本水資源開発株式会社関連会社)

人を潤し自然を守る
ECO UP PROJECT

 日本水資源開発株式会社

代表取締役 松永 利明

《東京営業所》

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町30-4 渋谷アジアマンション604

TEL 03-3477-2477 FAX 03-3477-7661

<http://www.yuusui-no-mori.com/>

新技術委員長に 中田康人氏が就任

東京都サッカー協会の新技術委員長として中田康人氏が2月1日より就任した。都立駒場高校の監督、U-16日本代表コーチ、JFAナショナルトレセンコーチ、JFAアカデミー福島チーフコーチなど一貫して育成年代に関わってきた。新技術委員長からのメッセージを、東京のサッカーファミリーのみなさんにお届けする。

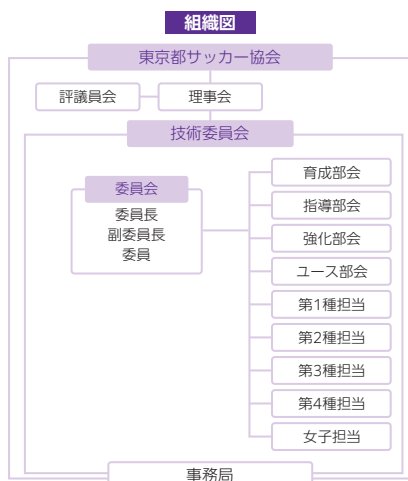


あらゆる年代のサッカー環境の改善に全力を尽くす

いつか東京に恩返しがしたかった

また東京のサッカーに関わることができる——。それが今回のお話をいただいた時の率直な気持ちでした。私は日本体育大学を卒業後、高校サッカーの指導者をしながら、東京都サッカー協会にもトレセンコーチやインストラクターとして関わってきました。高校の教師を辞めて、2009年から日本サッカー協会の仕事をしてきたのですが、いつか東京に恩返しをしたいと思っていました。これまでに培ってきたものを少しでも東京のために還元できたらと考えております。

私に与えられた技術委員長という役職は、一言でいえば「技術委員会の取りまとめ役」です。指導部、育成部、強化部のそれぞれの部と連携をとりながら、全体の活動方針を決めていきます。これまでとの大きな違いは専任であること。今まで技術委員長は他に仕事がある方が兼務されていたので、どうしても時間的な制約がありました。専任となれば、今までやりたかったけどできなかったことがやれるようになる。これまでに多くの方々が築かれたものをより発展させていくのが私の責務なのかなと思います。また、B級ライセンスなどの指導者養成ではインストラクターをやらせていただく予定です。



PROFILE

中田康人（なかた・やすひと）

1962年2月14日、北海道出身。大学卒業後、都立駒場高校でコーチ、監督を務める。その後、U-16日本代表コーチやJFAナショナルトレセンコーチ、JFAアカデミー福島チーフコーチなど育成年代に携わる。2021年2月より東京都サッカー協会の技術委員長に就任。JFA公認S級ライセンス保持。



技術委員長として取り組みたいこと

私自身が取り組んでいきたいと考えているテーマは3つあります。

- ①指導者養成講習会を受けやすくする
- ②サッカーの入口となる普及活動を充実させる
- ③あらゆる年代がサッカーを楽しめる環境を作る

東京には情熱と経験を持った指導者がたくさんいます。そうした指導者の需要に対し、現状では供給が追いついていないとは言えません。指導者養成講習会の回数や定員に対して、大きく上回る申し込みがあるため、ライセンスの取得に時間がかかってしまいます。さらに言えば、2020年度はコロナ禍の影響で例年のように開催できませんでした。東京都には40人を超えるインストラクターがいるので、みなさんの協力を得ながら指導者養成講習会を受けやすくしていきたいと思っています。

また、普及活動も重要なテーマです。キッズ年代というのは、いわばサッカーの入口です。東京都のサッカー人口が増えるかどうかは、ここでのアプローチにかかっていると言っても過言ではありません。キッズ年代にもたくさんの指導者が関わっているので、そこでの知識や経験を共有する機会を増やしたいです。

東京ではキッズ年代からシニアまで数多くのチームがあります。ただ、常に課題となるのがサッカーができる場所が少ないということです。プレイヤーはたくさんいるけど、グラウンドがない。あらゆる年代がサッカーを楽しめる環境を作るために、私の立場からもできることを考えてやっていきます。

サッカーファミリーのみなさんと協力して 東京を盛り上げたい

日本サッカー協会は「Japans' Way」というスローガンを打ち出していますが、これは特定の戦術やシステムといったものではありません。世界のトップに追いつき追い越すために何をするか、どの方向に進むべきかを示したものです。体格やパワーといった、世界のトップと比較した時に相対的に足りないものは高める努力はしつつも、技術力、持久力、組織力といった日本人の強みを打ち出していく。これは東京にも同じことが当てはまるのではないかと考えています。大きなコンセプトはありながらも、自分たちの強みを明確に打ち出していく。さまざまなカテゴリーの現場を回って、意見交換しながら、「東京らしさ」というものを考えていければと思っています。

改めて、12年ぶりに東京に戻ってきて、東京のサッカーに関われることをうれしく思っています。2020年はコロナでさまざまなイベントが延期・中止になるなど、サッカーを取り巻く環境にも大きな変化がありました。だからこそ、サッカーを通して多くの笑顔が生まれるようにしていきたいです。東京のサッカーをつなぎ、強くしていく。新たな挑戦にワクワクしています。ただ、当たり前ですが私1人では何もできません。選手、チーム、指導者……東京のサッカーファミリーのみなさんと協力しながら、より東京のサッカーを盛り上げたいと思っています。どうかよろしくお願いします。



SPECIAL INTERVIEW

日本ブラインドサッカー協会

専務理事 兼 事務局長 松崎英吾

「視覚障がい者と健常者の混ざり合う社会は実現できる」

©JBFA/H.Wanibe

日本ブラインドサッカー協会ではブラインドサッカー日本代表チームの強化に加えて、障がい者スポーツの新たな価値を提供しようと、さまざまなチャレンジを行っている。あらゆる活動の根幹にあるのは「ブラインドサッカーを通じて、視覚障がい者と健常者が当たり前前に混ざり合う社会を実現すること」。松崎英吾専務理事に、ブラインドサッカーのこれまでとこれからを聞いた。

スポーツを通じて 障がい者の世界を広げる

——日本ブラインドサッカー協会の主な活動内容を教えてください。
私たちのビジョンとミッションからお話しさせていただくと、ビジョンとして「ブラインドサッカーを通じて、視覚障がい者と健常者が当たり前前に混ざり合う社会を実現すること」、ミッションとして「ブラインドサッカーに携わるものが障がいの有無にかかわらず、生きがいを持って生きること」に寄与すること」を掲げています。

——「混ざり合う」という言葉が印象的です。

ブラインドサッカーでは障がい者と健常者が一緒になって勝利を目指します。ゴールを守るのは目が見えるGK、ゴールの位置を教えるガイドと呼ばれる役割もあります。障がいを持っているということは、社会の中で何らかの不利になっているわけです。スポーツを通じてチャレンジしやすい環境をつくったり、スポーツで出会った方々に理解をしていただいたりすることが必要だと思っています。

——ブラインドサッカーを通じて社会の障がい者への見方を変えていく。

はい。小学生～高校生向けに「スポ育」という出張授業を行っているのですが、ブラインドサッカー選手が出向いてデモンストレーションを見せたり、実際に体験してもらいます。多くの子どもは障がい者と日常的に触れ合うことがありません。でも、アイマスクをしている選手がボールを自由自在に操ってシュートを決めると、子どもたちの見方がガラッと変わるんです。また、大人向けとして企業研修も開催しています。ブラインドサッカーの価値は、見えない状態でチームワークを発揮すること。見えないからこそ、お互いのコミュニケーション、信頼関係、チームとしての親密感、それぞれの役割、目標設定などが大切になります。それらをブラインドサッカーを通じて学べる研修、これまでに多くの企業・団体に導入していただいています。

——松崎さんが事務局長に就任されたのは2007年です。どのようにしてブラインドサッカーを広めてきたのでしょうか。

ブラインドサッカーとは？

ゴールキーパー以外が全盲の選手で、アイマスクを着用し、音の出るボールを用いてプレーする。ボールを扱う技術はもちろん、視覚障がい者と晴眼者が力を合わせてプレーするため、「音」と「声」によるコミュニケーションが重要になる。パラリンピックでは「5人制サッカー」という競技名で呼ばれる。



体験型ダイバーシティ教育プログラム「スポ育」。2019年4月から2020年3月の1年間で634回実施し、21,272人が参加。事業を開始した2010年9月から累計で15万人を超える子どもたちが体験している

ブラインドサッカーに関わった当時は活動資金がないため、代表チームの合宿や遠征も選手が自己負担で参加している状態でした。なんとかしなければとスポンサー営業をして回ったのですが、どうにも手応えがない。強烈に印象に残っているのが「頑張っている人は他にもいる」という言葉です。当時の私は「とにかく見ていただければわかります！」と訴えていたんです。でも、興味がないスポーツを見るのはかなり敷居が高いはず。ブラインドサッカーを通じて、どんな価値を提供できるのか。それを打ち出さなければいけないと気づいたんです。

——ブラインドサッカーのように健常者と視覚障がい者が一緒にゴールを目指すスポーツはそんなに多くありません。

陸上のガイドなどはあるのですが、一緒にピッチに立って参加するというのは、ほとんどないと思います。刻一刻と状況が変わる中で、コンビネーションを高めていかなければならない。そういう点では障がい者スポーツの中でも珍しいといえるかもしれません。



東京パラリンピックでのメダル獲得を目指す男子日本代表チーム。精力的な強化に取り組んでいる

ブラインドサッカーを「見るスポーツ」にする

——日本ブラインドサッカー協会は有料チケット制、テレビ放送など革新的な取り組みを続けられています。

きっかけは、2011年のロンドンパラリンピック予選でした。仙台の野球場の一角を借りて開催したのですが、無料だったのにお客さんがほとんど入らなかったんです。野球場ですから、スタンドからピッチまでの距離も遠い。本来あるべき臨場感とか、応援の一体感が作れていなかった。とはいえ、人工芝で2000人ぐらいが入れて、見に来やすい場所はなかなかありません。その後2012年ぐらいから探し始めて見つけたのが、代々木競技場フットサルコートだったんです。あそこだったらコートが広いですし、仮設スタンドを建てられる。しかも原宿駅から徒歩5分で来られる。「ここしかない！」と。

——その代々木競技場フットサルコートの特設会場で行われた2014年の世界選手権は障がい者スポーツのイメージを変えたと思います。

これまでの障がい者スポーツはアクセスが悪かったり、閉じられた場所ですりどろと開催されていたので、一般の方がなかなか入りづらかったと思うんです。「本当に入って良いんだろうか？」と迷ってしまうというか。「見てください！」と言っている割には、見てもらう環境をつくれていなかった。そういう環境を変えていくためには、自分たちで作っていくしかありません。

——チケットを有料にしたのは勇気のいる決断だったのではないでしょう。

1年目は本当に売れるのか？と僕らも不安で仕方ありませんでした。でも、フタを開けてみれば開幕戦はチケット完売、立ち見が出るぐらいになりました。当日券が買えずに入場できなかった方もいたのは大変申し訳なかったのですが、障がい者スポーツでもお金を払って見たい人がいるというのを示せたのは、すごく大きかったと思います。



2020年6月にオープンした日本初のブラインドサッカー専用コート「MARUI プラサカ! パーク」

突風を力に変える「帆」はできている

——ブラインドサッカー日本代表チームは東京パラリンピックでの躍進が期待されています。

2016年のリオパラリンピック予選が終わった後、高田敏志監督が就任しました。東京パラリンピックでのメダルを目指すとともに、2024年、2028年も目指せる体制をつくっています。

——東京大会でメダルをとれば、世の中に大きなインパクトを与えるのは間違いありません。

スポーツでは代表チームが勝った瞬間に吹く「突風」があると思うんです。2018年の平昌オリンピックのカーリング、2019年のラグビーワールドカップなどがそうです。そうした突風を受け止める帆があるかどうかが大事になってきます。日本代表が勝った後に起こせる強い風を受け止める帆を、数年かけて準備してきました。今であれば、パラリンピックで何かしらの結果が出た時に、ブラインドサッカー全体の盛り上げにつながれると思っています。

——2020年6月には日本初のブラインドサッカー専用コート「MARUI プラサカ! パーク」がオープンしました。

専用練習場が必要だというのは2011年ぐらいから考えていたんです。中期的な目標の一つではあったのですが、さまざまなハードルがあって実現するまでにはかなりの時間がかかりました。2面あるのですが長い芝生と短い芝生と2種類があって、出場する大会に合わせて練習できるようにしています。また、クラブハウスにはユニバーサルデザインを取り入れています。

——改めて、これからの日本ブラインドサッカー協会としての展望を聞かせてください。

“パラバブル”という言葉があるように、東京オリンピック・パラリンピックの招致が決まってからは、ある意味で過剰とも言えるような状態だったとは感じます。大事なのは2020年大会が終わった後にどうあるべきか。このスポーツが持っている価値はなんなのか、それをしっかりと提供できているのか。私たちの原点としっかり向き合っていきたいです。それが長い目で見た時のチーム強化やスポーツの普及につながっていくと思っています。



PROFILE

日本ブラインドサッカー協会
専務理事 兼 事務局長

松崎英吾 (まつざき・えいご)

1979年生まれ、千葉県出身。国際基督教大学卒。学生時代に、偶然に出会ったブラインドサッカーに衝撃を受け、深く関わるようになる。一般企業勤務をしていたが「ブラインドサッカーを通じて社会を変えたい」との想いで退社。その後、2007年11月よりNPO法人日本ブラインドサッカー協会の事務局長に就任。



堀越、関東第一は共に初戦突破 堀越はベスト8に進出 第99回全国高校サッカー選手権大会



主 催：公益財団法人日本サッカー協会、公益財団法人全国高等学校体育連盟、民間放送 43 社
日 時：2020 年 12 月 31 日～2021 年 1 月 11 日 会 場：駒沢陸上競技場、味の素フィールド西が丘 他

「第99回全国高校サッカー選手権大会」に東京都代表として出場した堀越高校と関東第一高校。両校の全国での初戦の戦いをレポートする。



＜堀越高校 戦績＞	
2回戦 vs 大社(島根)	○1-1 (PK4-3)
3回戦 vs 丸岡(福井)	○2-0
準々決勝 vs 青森山田(青森)	●0-4



＜関東第一高校 戦績＞	
1回戦 vs 山辺(奈良)	○4-0
2回戦 vs 神戸弘陵学園(兵庫)	●1-1 (PK6-7)

29年ぶりの全国勝利。 そして同校最高のベスト8に進出

「何が起るのかわからないのが選手権ですから」と口にしたのはキャプテンのMF日野翔太。堀越高校が29年ぶりの全国勝利を引き寄せた陰には、自分たちで考えてチームを創り上げてきたという確固たる自信が潜んでいた。

大社高校との初戦。「全体的にスタートから硬かったと思います」と佐藤実監督が言及する中で、5分にはDF斎藤光のフィードから「ああいう形は練習でも結構あるので、信じて自分は走るだけでした」というFW尾崎岳人のヘディングで先制。幸先の良い形で試合の幕は上がったが、「いつもだったら通るパスも通らなかったり、空いている所を見られていなかった」と日野。持ち前のパスワークがスムーズに出てこない。

それでも我慢強く時計の針を進め、逃げ切り成功という雰囲気が漂い始めた80分。相手のシンプルなロングボールから失点し、追い付かれてしまう。ただ、堀越には同じような経験があった。東京都予選決勝。やはり終了間際に同点弾を許しながら、直後に勝ち越しゴールを奪い、全国切符を勝ち獲っていたのだ。



堀越の躍進を支えた、キャプテンの日野翔太選手

「予選の決勝でもこういう展開があったので、次は失点しないという所は大きかったかなと思います」と話す日野を中心に、選手たちがもう一度意識を集中させる。「PK戦になればキーパーの平野がしっかり止めてくれるという自信があった」とは尾崎。得意なPK戦も視野に入れつつ、冷静にそのまま試合をクローズ。結果的にそのPK戦できっちり勝利を手中に収める。普通なら焦ってしまうような展開でも、選手たちが自主的に考え、行動する“ボトムアップ方式”を採用して

きたことが、大きな成果を彼らにもたらした。

「頑張っている高校生に何かを表現する場を与えていただけているということが、今日の勝利以上に我々にとっては重要なことでした。本当に多くの皆様に感謝したいと思います」と試合後に語った佐藤監督。揺るぎないチームワークを武器に同校最高成績のベスト8まで勝ち上がった堀越の躍進は、都内の指導者たちにも大きな勇気を与えたのではないかな。

攻撃的スタイルを結果に繋げて初戦突破

「いろいろな人の支えがありましたし、応援してくれる人も多く中で、その人たちもみんな笑顔で終われるような試合をしたいと思っていたので、結果的に良かったかなと思います」とFW笠井佳祐は笑顔で試合を振り返る。未曾有の事態となった新型コロナウイルスの影響下、東京という感染リスクの高い地域で1年間を過ごしてきた関東第一高校は、多くの人への感謝を形に現わすような快勝で、山辺高校との初戦を堂々と突破してみせた。

前半から押し気味にゲームを進めながら、スコアレスで迎えたハーフタイム。小野貴裕監督が「非常に調子がいいのはわかっていたので、最初から行くか、交代で行くかで迷っていた」というFW平田晟也の投入を決断すると、スコアは一気に動き出す。44分には平田のシュートのこぼれ球を、笠井が押し込み先制。その2分後には平田が自ら追加点を記録。さらに64分と76分には笠井が続けてゴールを挙げ、ハットトリックを達成。守備陣も相手の攻撃を無失点で抑え、力強く勝利を手繰り寄せた。



「感染対策も意識高く行ってきた」とキャプテンの高木駿選手

関東第一は第95回、第96回に続いて3度目の全国出場となったが、過去の2回は自分たちが掲げてきたアタッキングフットボールを十分に発揮したとは言い難かった。それゆえにこの80分間で披露したパフォーマンスには、指揮官も「『やりたいな』と出せるステージに行くまでの道のりと、行った先での立ち居振る舞いの両立が難しいと思っていましたが、今回で少しでも攻撃的なサッカーをお見せできたのであれば良かったです」と手応えを感じたようだ。

「東京という感染者が一番多い地域だからこそ、感染予防をどここのチームよりも意識を高くやってきたという自信は、自分もチーム全体も持っています」とキャプテンのMF高木駿が話したように、まずは感染者を出さないという意識を共有し、その中でトレーニングを積み重ねていく難しい状況に置かれながら、自分たちの強みである攻撃的なスタイルを結果に繋げた関東第一。続く2回戦の神戸弘陵高校戦で、惜しくもPK戦の末に敗退したものの、チームとしての未来に大きな希望を灯らせる大会になったことは間違いない。

川崎フロンターレが天皇杯初制覇 天皇杯 JFA 第100回全日本サッカー選手権大会



主 催：公益財団法人日本サッカー協会／公益社団法人日本プロサッカーリーグ
主 管：公益財団法人東京都サッカー協会
日 時：2021年1月1日 会 場：国立競技場

天皇杯 JFA 第100回全日本サッカー選手権大会（以下、天皇杯）の決勝が2021年元日に東京・国立競技場で行われ、川崎フロンターレがガンバ大阪に1-0で勝利。今季のJ1を圧倒的な強さで優勝した川崎は、国内3大タイトルで唯一無縁だった天皇杯を制し、今季の目標としていた「複数タイトル」を手にすることとなった。

川崎フロンターレ 1-0 ガンバ大阪

0 (前半) 0
1 (後半) 0

得点者: 55分 三笥 薫

天皇杯第100回の記念大会はコロナ禍での開催

第100回の記念大会は当初、前回大会と同様88チームで開催される予定だった。しかしながらコロナ禍によってJリーグの試合日程が圧迫されたため、1回戦から5回戦までを47都道府県の代表チームとアマチュアシードのみで開催。準々決勝からJ2とJ3の優勝チームが、そして準決勝からJ1の1位と2位チームが出場することとなった。9月16日から始まった今大会は、幸い1試合も中止や延期になることなく日程を消化していったが、ちょうど準々決勝が行われた昨年12月23日、感染が再拡大している東京都を対象に、大規模イベントの人数制限の上限を5,000人に戻すことを政府が発表。これを受けてチケットの一般販売を取りやめたため、決勝の入場者数は1万3,318人ととどまることとなった。

14時40分にキックオフを迎えた試合は、攻める川崎、耐えるG大阪という構図が鮮明であった。前半のシュート数は、川崎の12本に対してG大阪はわずか2本。レアンドロ・ダミアンや三笥薫のシュートに、東口順昭が好セーブを連発するという展開が続く。この日のG大阪は、戦前の予想に反して5バックを採用。そのためか、川崎は何度となく決定機を作るものの、ゴールネットを揺らすには至らない。

川崎の先制ゴールが生まれたのは、エンドが替わった55分。レアンドロ・ダミアンのスルーパスから、ダイアゴナルに走り込んだ三笥が東口のボジ

ションを見極めながらゴール左隅に流し込む。それまで好守を連発していたG大阪の守護神も、これにはなすすべがなかった。均衡が敗れば、ここから川崎がゴールラッシュを見せるのではないかと。中村憲剛ラストゲームを望む人々の多くは、そう期待したに違いない。

しかしながら82分、G大阪の3本目のシュートが反撃の狼煙となり、川崎には気の抜けない展開が続いた。中村が出場するとすれば、怪我明けの大島僚太との交代が予想されたが、89分、大島に代わってピッチに送り込まれたのは脇坂泰斗だった。これが3回目の交代だったため、90分での中村の出番は消滅した。その後、4分のアディショナルタイムを経てタイムアップ。川崎は、稀代のパンディエラをピッチに送り出すことなく、天皇杯を制することとなった。

「自分のプランとしては、後半途中で憲剛を入れるという選択もありました。ただし、今日のゲームでは（同点にされて）延長も考えていた。その場合、スタジアムの雰囲気を変えられるのが誰かといえば、そこは憲剛でした。結果、そのまま勝てましたけど」。

最後まで中村を温存した理由について、川崎の鬼木達監督は試合後にこう語っている。そして「憲剛は『勝利が優先だから』と話してくれました」とも。そこで思い出されるのが、4年前の元日に吹田スタジアムで開催された天皇杯決勝。川崎が初のリーグ制覇を果たし、悲願の初タイトルを手にした2017年は、鹿島アントラーズに1-2で敗れた。この4年前の経験があればこそ、中村は自身のキャリアの終わり方よりも、勝利を優先させたのであろう。

府中市の府ロクサッカー少年団出身で、都立久留米高校を経て中央大学に進学した中村。中大サッカー部時代には、関東サッカーリーグ2部降格と1部復帰という苦労を経験したが、その後入団した川崎を一度も離れることなく現役生活に終止符を打った。

日本中から愛された中村憲剛の現役ラストマッチとなった天皇杯決勝。サポーターからピッチ上で声援を受けることは叶わなかったが、18年のキャリアを終える中村に対して、熱い拍手はいつまでも鳴りやむことはなかった。



この試合で現役引退となった川崎の中村憲剛選手。試合出場はならなかったが有終の美となった。



感染対策のため入場制限での開催となった会場の国立競技場

技術委員会

天井効果をなくし

世界に通用する選手を育てる

技術委員会には大きく分けて3つの部会があります。育成部会、指導部会、強化部会です。

育成部会はトレセン活動を統括しています。東京都ではU-12から16まで1学年ずつ5つのカテゴリーで構成された東京トレセン、都内を7つの地域に分けた地域トレセンを行なっています。トレセンの目的は、男女ともに日本を代表し、世界で活躍する選手を育てること。優秀な指導者のみなさんが各チームで選手を育成してくださっていますが、優秀な選手を集めて、東京以外のチームと試合をしたり、海外遠征に行ったりして、普段は味わえないような刺激を与えていくことが重要だと考えています。どうやって“天井効果”がない環境を作っていくかは大きなテーマです。

指導部会ではB級、C級、D級、キッズなどの指導者講習会を行っています。また、2012年から「コーチアーズアカデミー」という東京都の独自の試みを始めました。これは指導実践を中心にB級の内容に相当する実技・講義を行うというもので、特に若手指導者の発掘および指導力の向上、47FAインストラクターの養成を目的としています。

強化部会は国民体育大会に出場する東京都代表チームのスタッフ編成や選手の選抜を行っています。少年男子は技術委員会が主体になっていますが、成年男子は社会人連盟、女子は女子連盟が中心となっています。2022

副会長、前委員長代理 大西正幸

副委員長、ユースダイレクター、育成部会長 齋藤登

年の栃木国体よりサッカー女子が成年女子と少年女子(U-16)の2種別に分けられます。少年男子と同様に少年女子もU-12年代から長期的な視野で強化につなげていく方針です。

2020年度は4月から8月までトレセン活動を中止しましたが、9月から感染予防対策を徹底しながら再開しました。2021年度に向けては、正直なところ不安な点もたくさんありますが、新型コロナウイルスの感染状況を見ながら実施できればと思っています。指導者養成事業もほぼ開催できず、B級講習会を受ける予定だった約50人の方が保留になっています。今後はオンラインなどもうまく活用しながら進めていきたいと思っています。また、2021年度の国体に関してはどの種別も2020年度のスタッフをほぼそのままスライドすることが決まりました。国体が開催されたときには良い結果を残せるように、できるだけの準備をしていきたいと思っています。

技術委員会の主な取り組み

「トレセン」

東京都の優秀な選手を集めてトレーニングや試合を行う

「指導者講習会」

B級、C級、D級、キッズリーダーの指導者講習会を開催する

「強化」

国体へ出場する東京都代表チームのスタッフ編成や選手を選抜する

審判委員会

個性のある優れた審判員をいかに育てていけるか

審判委員会ではサッカー、フットサルの4級、3級の認定・更新講習会、トレセンなどを通じて審判員の育成を行っています。東京都は47都道府県の中でもトップの審判登録者数を誇ります。

我々が常に考えているのが「個性のある優れた審判員をいかに育てていけるか」です。それに求められるものは何か？様々ありますが一つ挙げるとすれば「サッカーという競技を理解すること」です。ルールを熟知するのはもちろんですが、それだけでは十分とは言えません。選手の感情、スコア、試合の流れ…そうしたものを極めて最適な判断を下していくことが必要です。そのためにも、審判員にアドバイスし、評価する審判アセッサーを派遣しています。アセッサーはさまざまな観点から判定をチェックし、試合後はフィードバックしていきます。うまくできたところ、できなかったところを掘り下げることで、よりよいレフェリングにつなげるのが狙いです。

近年は若くして審判を始める人が多くなっています。トレセンなどに参加している審判員のなかには「Jリーグのピッチに立ってみたい」「W杯で笛を吹きたい」という目標を持っている方もいます。東京都は公式戦の開催数が多いので経験を積む場所は豊富にあります。Jリーグなどで活躍している先輩審判員から話を聞きやすいのも特徴と言えるでしょう。

委員長 牧野明久

審判統括部会長 飯田淳平

2020年度は新型コロナウイルスの影響で予定通りに審判資格講習会を開催できず、例年に比べて審判資格取得者は大幅に減っています。東京都では全国に先駆けてウェブシステムを利用した資格認定講習会を始めました。2021年度もウェブを活用した形が増えていくことになるでしょう。

そこで課題となるのはサッカー経験がないレフェリーへのフォローアップです。いきなり試合に入って笛を吹くのは簡単ではありません。実技の場を提供する、もしくは実践的な研修映像を用意していきたいと思っています。

トレセン活動もほぼ開催できませんでしたが、参加人数を絞るなど感染対策を徹底しながら、東京都の審判員のレベルアップのために努めていきます。

審判委員会の主な取り組み

「審判資格認定・更新講習会」

3級、4級の審判資格の講習会を開催する

「トレセン」

2・3級の審判に向けてトレーニングや研修を行う

「アセッサー派遣」

審判員を評価するアセッサーを派遣しフィードバックする

フットサル委員会

委員長 松村栄寿

どうやったらやれるかをみんなで考えていく

フットサル委員会は、専門委員会の中でも少し特殊な位置付けかもしれませんが、1種から4種、女子までの全カテゴリーの大会、フェスティバルなどの普及、審判、施設整備など、フットサルにまつわるたくさんの事業を担当しています。

東京都のフットサルの状況に関しては、登録チーム数の推移は全体としては横ばいと言える状況です。ただ、近年はユース年代の盛り上がりが目立ちます。その要因としては、Fリーグの下部組織のチームが整備されてきたことが挙げられるでしょう。かつてはサッカーをやめた後にフットサルに転向する選手が多かったのですが、今は中学生、高校生からフットサルをやるという新たな流れができています。サッカーでもフットサルでも大きくくれば「サッカーファミリー」ではありますが、その中でもフットサルに主軸を置く選手が増えているのは喜ばしいことです。若い選手たちがたくさん入ってくれば、新陳代謝がうながされ、全体的な活性化につながっていきます。

また、これから間違いなく伸びていくのはシニア年代です。フットサルチームの多くは2000年代から活動を始めていますが、当時20代、30代だった選手が40代、50代になっています。シニアカテゴリーを充実させていくことはフットサルにとって重要になっていくでしょう。

競技活動と並行して、JFAファミリーフットサルフェスティバルのよう

な普及活動も行っています。そこに来た人が、「またやってみようかな」と個人で参加したり、チームを作って大会に出たりする。そうやってフットサルの輪を広げていくことが重要です。

2020年度は大会やフェスティバルといったイベントの多くが延期や中止になりました。2021年以降も何らかの形でコロナと付き合っていくことになるでしょう。参加チーム数を限定したり、試合の組み方を変えたり、リーグをトーナメントにしたり、午前と午後で入れ替えたりするなど新たなガイドラインを作っていきたいと思います。

やれないと諦めるのではなく、どうやったらやれるかを考えていく。フットサルに関わる選手、スタッフ、関係者、全員でこの状況を乗り越えていきたいと思っています。

フットサル委員会の主な取り組み

「フェスティバル」

フットサルの普及拡大のためのイベントを開催する

「大会」

1～4種、女子まで各カテゴリーの大会を開催する

「運営スタッフ登録」

大会の設営・運営を担当するスタッフを派遣する

キッズ委員会

委員長 平野正義

子どもたちの楽しみをなくすわけにはいかない

私たちキッズ委員会が担当するのは、子どもたちのサッカーへの“入り口”です。主な活動内容としては幼児を対象としたフェスティバル・大会、幼稚園や保育園にサッカー指導者を派遣する巡回指導、キッズリーダー養成講習会となります。もともとキッズ委員会はU-10までを対象としていましたが、2015年以降は小学生年代は少年連盟が、U-6以下をキッズ委員会が担当するという形になりました。

私たちの合言葉は「全員で子どもを育てよう」。東京にはJリーグクラブや地域のクラブなど、多くのチームがあります。たくさんの指導者が関わっているので、フェスティバルや大会を開催する際にも協力体制が得られやすく、他県の方から「東京が羨ましい」と言われることは少なくありません。

巡回指導ではサッカーを教えるというより、体を動かす楽しさを知ってもらうことをコンセプトにしています。昔に比べると、今の子どもたちは外で遊ぶ機会が少なくなっています。最初からボールを使うのではなく、鬼ごっこをしたり、ネットをくぐったりして、遊びながら徐々にサッカーに移行していきます。

子どもによってサッカー経験の違いはあるので、その点はスタッフが配慮しなければいけません。よくあるのは、みんなでゲームをするとサッカーをやっている子ばかりが目立って、初めての子はボールに触れずつま

らなそうにしているということです。これでは「サッカーは楽しくない」という印象を持たれてしまう。レベル別にチームを分けるなどして、全員が楽しめるように工夫することが必要になります。

新型コロナウイルスはキッズ委員会の活動にも大きく影響しています。フェスティバルについては通常よりもチーム数を減らしたり、今まで1回でやっていたものを午前と午後に分けたり、密にならないようなコートの配置にしたり、できる限りの工夫をしながら開催できればと考えています。巡回指導についても、幼稚園、保育園と十分に連絡をとって、リクエストを聞きながらやっていくつもりです。また、スタッフとの接触が制限されるため、今まで以上に保護者の方の協力も必要になってきます。

子どもたちの楽しみを全くなくすわけにはいきません。子どもたちの笑顔が一つでも多く見られるように、力を合わせて活動していきます。

キッズ委員会の主な取り組み

「フェスティバル・大会」

さまざまな年代、レベルでサッカーを楽しむ

「巡回指導」

幼稚園や保育園にサッカー指導者を派遣する

「キッズリーダー養成講習会」

キッズに関わる指導者向けに講習会を開催する



「連盟ニュース」では、各連盟の大会結果・取り組みを4連盟ずつ掲載していますが、本号では全12連盟のコロナ禍での取り組みを紹介します。

2020年度は、Over35のマスターズは中止になりましたが、その他のリーグ戦についてはほぼ開催できました。1部リーグは16チームの総当たり戦で行う予定でしたが、ブロックを2つに分けて総当たり戦を行って、両ブロックの1位同士、2位同士で順位決定戦を行い、上位3チームが関東大会に進むことになりました。2・3・4部についても同じ形で開催し、昇格は有り、降格は無しとしました。今年度は、新型コロナウイルス感染症対策によってリーグ戦を辞退したチームにつきましては、2021シーズンに限り、2020シーズンに所属していたカテゴリーから復帰出来る事にしました。

また、日程等決定していたものを再調整する必要があり、リーグ戦をいかに成立させるかという苦労もありました。7月に開幕したリーグ戦では、感染対策の正解が見えない中で、感染者を出してはいけないという気持ちと、選手たちにプレーをさせたいというところでは非常に難しい状況にありました。無観客にして、チーム関係者の来場も必要最小限にさせていただき、ベンチではマスク着用。手洗いなど当たり前にやることをチーム・選手に周知徹底して、みなさんが懸命に取り組んでくれたおかげで、大会の中で感染はありませんでした。

苦しい一年でしたがうれしいこともあり、南葛SCが関東リーグ昇格を決め、東京都リーグを卒業することになりました。関東リーグ1部所属のCricao新宿も、Jリーグ百年構想クラブ申請を行い、Jリーグ入りを目指すことになり、東京のサッカー界を活性化させてくれると信じております。

2021年度は、今まで通りのリーグ戦の開催ができれば良いと思っています。今後の新型コロナウイルス感染症の状況により、今年度のような対応を考えなければなりません。今回培った事を生かし運営していきたいと思っています。2020年度はリーグ戦を運営する中で、各部委員長と委員長会議をオンラインで行いながら課題や問題の報告を受けたり、リアルタイムで現場のメンバーから報告を受けて対応を取ってまいりました。各カテゴリーの委員長とは積極的に情報交換を行い、課題の共有化を行ってまいります。感染対策は今後も継続していく必要があると思いますので、他の種別での対応も参考にさせていただきながら、より良い試合運営をしていきたいと思っています。

2020年度は、3月中旬から開催予定だったアミノバイタルカップの予選を8月上旬に延期するというスタートとなりました。リーグ戦は4月開幕予定でしたが、こちらも延期が続き、開幕できたのは1・2部が9月、3・4部が10月という状況でした。4年生にとっては引退前の最終シーズンであり、一試合でも多く公式戦の場を提供するために、1・2部は全チーム総当たりで行った後、二回目を目上上位リーグと下位リーグのそれぞれ5チームずつに分けての総当たり戦も行いました。3・4部については一回戦の総当たり戦のみで行いました。

東京都サッカートーナメントの予選については、試合で決めたいという気持ちが強く悩みましたが、スケジュール的に開催が難しく、1部の上位チームを東京都の代表として選出することとなりました。

その中でも一番苦労したのが試合会場の確保でした。各大学の課外活動の許可は下りているもののグラウンドを提供できない大学が多く、今年度東京がホストとなっていた関東大学サッカー大会についても、北関東の大学での運営をお願いせざるを得ませんでした。また、リーグ戦では試合開催を最優先と考え、大学外のグラウンド確保のためにも最大5万円補助するという初めての試みも行いました。

感染対策ではステップ1～3までのガイドラインを策定し、全試合に感染対策責任者を配置し、各項目のチェックやチーム関係者・審判員の個人情報を提出してもらい、万が一感染者が出た場合に濃厚接触者などの情報を保健所にすぐに提供できるシステムも作りました。山梨の会場では、感染対策責任者が現地に行くことができず、オンラインを使ってチェックを行うということもありましたが、遠隔でもある程度の対策をとれたということは一定の成果となりました。また、感染対策で施設の利用時間に制限がある中での運営でしたが、学生幹事のみなさんが今まで以上に頑張ってくれたおかげで無事にリーグを終えることができました。本当に感謝しています。

連盟の体制としては組織改編を検討しており、総務、競技、広報、財務それぞれのやるべきことを整理し、円滑な組織・大会運営ができるよう理事と学生幹事が同じ方向性の中で協働していきたいと考えております。

2021年度の加盟は42チームとなり一段と大きな組織になりますし、関東で戦うチームを東京から輩出できる良いリーグにしていきたいと思っています。

東京都社会人サッカー連盟

副理事長
田中浩



関東リーグ昇格を決めた南葛SC



ゴール後に喜ぶ際も感染対策が行われていた

公式サイト
<https://tokyo-fa.com/>



東京都大学サッカー連盟

理事長
上向貫志

副理事長
大嶽真人



コロナ禍においてもレギュレーション変更などでリーグ戦開催をした

公式サイト
<http://www.f-togakuren.com/>



東京都シニアサッカー連盟

委員長
佐藤也寸志

事務局
森本勝彦

例年2月中旬からOver40、50の全国大会東京予選会をスタートさせ、その決勝大会のために味の素フィールド西が丘をお借りしていたのですが、残念ながらすべて延期となりました。活動再開したのは7月頃で、まずはOver40、50の予選会を行い東京都の代表チームを決定させました。リーグ戦については、Over40とOver50がそれぞれ6リーグ、Over60が5リーグと非常に多く、全ての試合を消化させることは難しいため、10チーム編成のリーグを5チームずつに分けてリーグ戦を行い、最終的に1位同士などの順位決定戦を行い、1・2・3部の入れ替え戦までは行うことができました。

感染対策については初めての経験でわからないことばかりでしたが、ガイドラインを策定し連盟HPを通して周知したうえで試合を開催できるよう準備しました。4月頃は消毒液を購入したくてもどこも売り切れ。7月に再開する頃には、役員やチーム関係者がそれぞれ購入してくれた物で対策することができました。シニア連盟に所属する選手は4000名を超えています。この状況で試合を行うことについての意見は半々に分かれたような印象がありましたが、グラウンドが閉鎖されない限りはガイドラインをしっかりと守ってやっていこう、ということで推進していきました。試合再開日程の延期が続き、何度も調整が必要で苦しい時期もありましたが、どうにか最後までやり切ろうという思いで知恵を出し合い、連盟としても使命感をもって各大会を開催することができました。

2021年度については、Over40で60チーム、Over50で56チーム、Over60で55チーム、さらには65が26チーム、70が14チーム、75で6チームを含めると217チームが参加予定になっていて、昨年に比べても16チームが増え、総勢4,419名の選手が登録予定となります。毎年、シニア連盟は選手登録数、チーム数が増え続けている状況で、必然的に試合数が増えグラウンドの確保などが大変になってくることが予想されます。今後の状況によっては大会方式や試合時間の変更などを考える必要があるかもしれませんが、今のところは変更せずにリーグ戦は元の姿で開催する方向です。

また、例年2月の第一土曜日に開幕式を開催しており、その中で前年度の表彰式やOver40、50のトーナメント戦の抽選会を行っていました。今年は開催が難しい状況下ではありますが、公正な抽選会とするためYouTubeでのライブ配信を行う予定です。代表者会議についても感染予防に配慮した開催になるかと思います。顔を合わせることができないのは寂しいですが、感染予防対策のためにも新しい試みにはチャレンジしていきたいと思っています。



全国大会出場を決めた「PET」



関東予選会を戦った「東京都ロイヤル」

オフィシャルサイト

<http://www.tokyofa-senior.com/>



我々の連盟は各区市町村の協会・連盟と東京都サッカー協会とのパイプ役となる組織です。都民体育大会と区市町サッカー選手権の開催、3級審判研修などを行っています。

2020年度は、5月から予定していた東京都体育協会主催の『都民体育大会』、東京都サッカー協会主催で行っている東京全地区の代表チームが競う『区市町サッカー選手権大会』が中止になりました。直前まで開催する方向で動いていたので、感染対策で更衣室の利用を禁止する時にどう対応するかなど、どのように対策しながら運営していくのか綿密に調整していました。その他の種別での大会を見て参考にすることで、飲水タイムの導入など漏れていることもありましたが、次回に向けてより徹底した準備をしていきたいと思っています。

2021年度に向けては両大会とも日時・会場は決定しましたので、募集をかけて参加チームを集めていく段階になります。コロナ禍でどれだけのチームが集まるか不安な部分もありますが、しっかり対策しながらより良い運営をしていきたいと思っていますので、たくさんの応募をお待ちしています。また、都民体育大会は74回を数え大きな歴史がある大会です。東京都の国体のような大会で、サッカーに限らず様々なスポーツで競われて、最終的に各競技の総合ポイントで優勝が決まる大変盛り上がる大会になっています。競技は違っても同じ地域で暮らす人々と一緒になって盛り上がるので、地域の活性化にも大いに役立っていますし、こんな状況だからこそ開催して、心身ともに楽しめればと思います。

区市町サッカー選手権大会もこの名前になって15回と歴史を積み重ねてきている大会ですので、2021年度は開催できればと思っています。

例年と違うのは、大会のための代表者会議が開けない中で情報をどのようにお伝えしていくか。Web会議などが出来れば良いかと思っていますが、各チームがその対応が可能なのかなど、探りながら検討していきたいと思っています。会議以外にも、新しい時代の流れに追いついていけるように、みんなで協力しながら頑張っていきます。

東京都地区サッカー連盟

委員長
児玉健生



74回を数え大きな歴史のある都民大会の優勝旗



区市町サッカー選手権大会の優勝盾



例年全国大会予選を5～6月に、関東大会予選を9月に行っています。2020年度は、東京オリンピック・パラリンピック開催年に当たり実施時期が重複することから全国大会の開催が見送られており、全国大会予選は行わず、5～6月にかけては関東大会予選を行う予定でいました。なお、一部七県持ち回りで10月に開催している関東大会は東京都が開催年度に当たっており福生市での開催が決まっていた。

しかしながら、4月の緊急事態宣言発令やその後のグラウンド使用が不可となる中で5～6月の関東大会予選を組むことはできず、夏以降のコロナ禍もあり福生市での2020年度関東大会実施は中止となりました。毎年1月に行っているフットサル大会も中止しました。

私たちは選手である前に自治体職員であり、エッセンシャルワーカーとも言え、住民の皆さんのための仕事で第一で、心身ともにリフレッシュできるサッカーを楽しむことができず寂しい一年となりました。

2021年度に向けての計画については、全国大会予選が開催できる状況になるか不安な面も多くありますが、開催に向けて準備を進めていきます。関東大会は2012年に八王子市で開催し、2020年は福生市が会場となる予定でしたが我々も8年間準備をしてきましたので、1年延期で開催が出来ないかと相談をしている段階です。

自治体連盟は、日本サッカー協会に登録しているチーム・選手で構成をしていて意欲の高いチームばかりですし、2020年に続いて21年も大会が何もない、という状況はどうにか避けたいと強く思っています。コロナの状況が落ち着くことを願うばかりです。

また、自治体連盟の存在意義として「全国に天然芝のグラウンドを作る」ということが大きくあります。これまではそれを目的として、自治体職員の全国大会では天然芝のグラウンドでなければ開催出来ないとされていました。しかし、近年では人工芝のクオリティが向上してきたことから人工芝での開催も認められるようになり、東京も関東大会を開催する上で、福生市営競技場を人工芝化しました。2020年の春にオープンして、これから落ししの大会の一つとして、秋に関東大会を開催する予定でしたが、それが中止になったことは非常に残念でした。

公共施設の利用にあたり、コロナ禍においては感染対策を徹底して行うことが新たに求められるようになりました。自治体の競技場においても、利用するにはしっかり対策して頂かないと競技場としても信用を失ってしまい、利用すること自体が難しくなってしまう。利用する際はくれぐれもご配慮いただきますようお願い申し上げます。みんなで協力して、このコロナ禍を乗り越えましょう。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、年間事業計画の軸である春、夏、秋の公式大会や海外遠征、フットサル大会すべてが中止となりました。

専門学校は年間の授業時間数が決まっており、多くの学校は1回目の緊急事態宣言の発出を受け、授業開始が2カ月ほど遅れるなど、休日を返上して授業時間の確保に翻弄されました。大会の開催については、自前のグラウンドを持っていない学校が多いため、大会開催は公共のグラウンドを借りることが基本ですが、土日のグラウンド使用競争率は高く、ウィークデーでの開催が中心となっています。その為、試合の日は授業を公認欠席という形となり、その後で補習授業をして埋めていく形でしたが、その補修時間を行う時間確保も難しいのが現状でした。

試合をしたいと思う学生が多くいたことは重々承知しており、監督などからも最後の学生生活で1試合でもやらせてもらえればという声もありましたが、各学校の感染対策にも差があり、課外クラブ活動の校長許可についても足並みをそろえることができない状況から、連盟としては学生の安全・衛生確保を第一に考え、大会毎に慎重に協議を重ね、非常に難しい判断ではありましたが苦渋の決断として各大会を中止としました。

当連盟年間計画の中でも大きな事業である、40年前に「学生に夢を」と始まった海外親善交流試合は、選抜チームを構成して毎年海外遠征を行ってききましたが、今年は残念ながら中止と判断しました。学生は普段専門分野について学びながらサッカーを頑張っている中で、サッカーを海外で行うという機会はあまりありません。公式試合ではライバルですが、選抜チームということからライバル選手がチームメイトになり同じ目的や時間を共有する経験はとても意義深いものになっています。今後もそのような場を提供したいと考えていますが、海外が難しければ交流という観点で考えれば国内遠征ということも一定の意味があるのかとも思っています。

2021年度に向けては、今年度の経験を貴重と捉え、可能な限り本来の事業実施に軌道修正をしながら、一方で新しい運営方法なども考えていきたいと思っています。

東京都自治体職員 サッカー連盟

会長
齋藤功

広報
伊藤茂男



関東大会が行われる予定だったネッツ多摩S&Dフィールド(福生市営競技場)

東京都専門学校 サッカー連盟

副会長
横山重明

副会長兼事務局長
佐々木善



例年盛大に開催されている開会式も2020年度は開催することができなかった

オフィシャルサイト

<http://www.tokyofa.or.jp/category/league/academy.html>



2020年度は関東大会の予選から始まる予定でしたが、コロナの感染状況により何度も延期が続き、最終的には関東大会自体が中止され、都予選も行いませんでした。インターハイ予選も4月末から始めていく予定でしたが予定が組めない状況が続く、これも大会自体の中止が決定となりました。インターハイで引退する選手も多くいますので、なるべく開催したいと思い調整を続けていましたが、開催できずに心苦しい気持ちでいっぱいでした。

6月頭から各学校で分散登校による対面授業が再開され始め、部活動も徐々に再開されていきました。長期間活動停止していたためリハビリ期間も必要でしたので、選手権予選は9月から始めることとしました。大会開催にあたっては、感染対策のガイドラインを準備して、感染拡大させないように徹底しましたが、担当した先生が大変な苦勞をされながら準備してくれました。グラウンドがなかなか確保できないこともありましたが、チームの滞りがかぶらないように試合間を長く取り、試合が終わったチームはすぐ退場、次のチームと会わないような配慮などの感染対策を徹底して、各学校のグラウンドをどうにか提供して頂きました。選手権予選については開催できませんでしたが、準々決勝までは無観客となりメンバー外の部員と保護者さえも入ることができなかったことは、非常に辛い決定でした。準決勝からは部員と保護者のみ観戦いただき、最終的には決勝まで試合を行うことができたのは、多くの方の協力があったことで感謝しております。

コロナ禍で得たこととしては、選手権二次予選の抽選会をリモートとし、初めてYouTubeでのライブ配信をしながらの開催としました。これによって一般の方にもお見せできるようになり、多くの方に視聴いただき非常に好評でした。これから色々な方にご覧頂けたら良いなと思っています。

2021年度に向けては例年と同じ形で進めたいと思っていますが、今後の状況によってはまた頭を悩ませることになるかもしれません。大会以外では、東京都高校選抜を作って海外遠征をしようとして計画していましたが、これも中止になってしまいました。具体的なところまで計画を立てていましたので、来年度は実現できたら良いなと思っています。

コロナ禍により活動ができなくなったことで、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前ではなく、有難いことだったのだと痛感しました。一日でも早く、サッカーを楽しんでいた日常に戻ることを切に願う一年でした。

2020年度はコロナ禍によって、ほとんどの大会が縮小開催や中止となり、本当に厳しい状況でした。クラブユース連盟と中体連の加盟チームで行っているTリーグは、感染状況を考慮し「U-15地域交流大会」と銘打ち各地域で実施しました。U-13の大会についても同様に地域ごとに開催しました。また、U-14大会、U-17の新人戦については感染対策を講じてスタートしましたが、2回目の緊急事態宣言が発令され中断するばかりでありませんでした。トーナメントにて実施した高円宮杯都大会、関東大会、全国大会は感染対策をとったうえで無事開催できました。クラブユース選手権東京都予選、関東大会、全国大会は中止されましたが、関東クラブユース連盟の主催で全国大会の代替大会が11月から12月にかけて開催されることとなり、高円宮杯の都大会にクラブユースの代替大会の予選会をリンクして、上位チームで高円宮杯の関東大会に出場するチームと、クラブユースの全国大会の代替大会に参加するチームを決めました。

一回目の緊急事態宣言時に、新型コロナウイルス対策委員会を組織編制して、各試合で起こるであろう事象にすぐに対応できるよう整えました。また、随時連盟のホームページで情報をお伝えしていきました。すべてが初めてのことで、何が正解なのか、どうすれば皆さんが困らないのか悩みながらの決断でしたが、子どもたちが安心安全な環境でサッカーを実施出来ることを最優先としました。

また、理事会や代表者会議などはすべてオンラインで行ったことで、タイムリーに、そして回数も多くすることができました。3種委員会、中体連とも迅速かつスムーズに連携できたことは、苦しい中でも今後に活きる経験になりました。また、クラブユース連盟では学校と違い、安定して会場提供できるチームが少ないという点にコロナも相まって厳しい状況でしたが、皆さんにご協力頂いて実施することができました。今後も加盟クラブの皆さんと協力し、知恵を出し合いながらやっていきたいと思います。

学校が休校になり生活リズムが激変したことで、子どもたちは精神的にも負担が大きかったでしょうし、サッカーを楽しむ環境が常にあることが、どれだけ幸せなことなのかを感じていると思います。厳しい状況は続きますが、一日でも早く今までのようにサッカーを思いきり楽しめるよう、環境づくりに努めていきたいと強く思っています。

最後に、当連盟は設立28年目に入り、設立当初からの組織編制や規約など様々な見直しをする転換期に入りました。新規加盟クラブが昨年2020年は10チーム、今年2021年が16チームと増え続けている中で、時代の流れとともに柔軟に対応していきたいと思います。

東京都高等学校体育連盟 サッカー専門部

委員長
玉生謙介

広報
船木克哉



感染症対策を徹底した選手権予選。監督記者会見はリモート開催とした
(写真提供：全国高体連サッカー専門部記録部高校サッカー年鑑)

公式サイト

<http://tokyosoccer-u18.com/>



東京都クラブユース サッカー連盟

理事長
丸茂敦

事務局
鈴木泰徳



選手それぞれで備品を分けたり、ディスタンスをとって入場するなど、コロナ対策を行い運営を行った

公式サイト

<https://tokyo-cy.jp/>





2020年度は、総合体育大会が7月から開催される予定でしたが、コロナウイルスの感染状況を考慮しすべて中止としました。その先に続く、関東大会、全国大会も中止になってしまいましたが9月ぐらいからやっと動き始めて、11月からの新人大会は無事開催することが出来ました。その他、各地域での選抜活動も回数や人数を絞ったりしながら出来るだけ技術の向上を止めないように活動が続けていましたが、どうしても活動できない地域もありました。3年生のためのメモリアル試合も地域によって活動の差はありましたが、最低1試合はほとんどの地域で実施できたと思います。

感染対策は入念に行っていました。その中で一番学んだのは人の力は大事なこと。子どもたちのためにやってくれている顧問の先生ばかりで、知恵を絞って、色々なアイデアを出してくれました。会場でも率先して消毒の準備から施設の管理などを皆で協力して手伝ってくださって、非常に助かりました。もちろん課題もあり、中体連は特に保護者の協力があって活動ができていたのに、一言に「感染対策のため」といってすべて無観客にしてしまっていて良いのかを非常に悩みました。中学校生活最後の晴れ舞台を保護者の皆さんが見られないことは避けたかったので、都大会の準決勝、決勝では保護者一名に限り入場できるようにしました。ただ、そのためにはもちろんマンパワーが必要で、観客の席が密にならないようにセッティングをして、入場する時に名簿と検温をチェック、必ず消毒をしたうえで入場してもらうという形でした。苦勞したことも多くありましたが、先生方、保護者の皆さんの協力もあって無事に一年を終えることができたと思っています。

2021年度に向けて、夏の総合体育大会がメインとなってくるので開催に向けて準備をしていきます。今年は多くの大会を開催できるよう今回の経験を生かして、3年生には最後の大会を安心して、思いきりプレーできるような大会にしたいと思います。また、保護者の方にどのように見ていただけるかもしっかり考えていきたいと思います。

2020年度については、ブロック大会、中央大会、各トレセン活動、イベント、連盟内での指導者・審判講習会という部分において、ほとんどが中止・延期となりました。その中で実施できたのは、JFA全日本U-12サッカー選手権大会の東京都予選とリーグ戦でした。夏休み期間中から動き出すこともできたかもしれませんが、長く活動停止していたため個々の選手の運動能力も低下している中で、近年の異常な暑さの中で急に動くことは選手の負担が大きいと判断し、9月からスタートしました。

全日本の予選は、当初予定していた参加チーム数や日程を急遽変更し、チーム数を減らして十分な感染対策を取って開催することで、なんとか全国に代表チームを送り出すことができました。そして、代表となったFCトリアネーロ町田が東京としては13年ぶりの優勝を果たしてくれました。創部4年で初出場・初優勝となりました。技術が高く、東京都予選でも能力が抜けていたかと思います。指導者の皆さんの努力と選手の気持ちがマッチした結果ではないかと思っています。これは、コロナ禍でもうれしいニュースでした。

リーグ戦については、消化できるところまではやろうとスタートをしましたが、二回目の緊急事態宣言により再度中断せざるを得ない状況でした。

4種はお父さんコーチのボランティアでやっているチーム、月謝を頂いてサッカーで生計を立てているクラブと様々ある中で、コロナウイルスの感染拡大によりクラブを解散しなければならない状況に陥ったチームが多くありました。その中でも、日本サッカー協会の財政支援プログラム、東京都サッカー協会独自の財政支援事業を活用させていただき、多くのチームが存続することができたことには、心から感謝しております。

2021年度に向けて、今後また緊急事態宣言が出た時に、対応方法などについて統一した意識を持ちながら意思決定できるようにシミュレーションしていきたいと思っています。また、暴言暴力の根絶に向けて、4種の場合は指導者の関係する部分が大きく、意識改革のためにも指導者講習会を行っていますので、指導者のスキルアップに向けて参加を呼び掛けていきます。夏休み期間については暑熱対策ということで東京でも独自に、出来るだけ活動を避けるように指示を出していましたが、関東協会4種委員会においても関東M-T-Mと、関東大会について2022年度から7・8月での開催時期を遅らせる方向となっています。チーム数が多い東京においては、リーグ戦の日程等調整が求められることになってきますので、大きなトピックになるかと思っています。

東京都中学校体育連盟 サッカー専門部

委員長
艸川幸治



12月に行われた新人大会は、感染対策をとった上で無事に開催した

オフィシャルサイト
<http://www.soccer-tokyoctr.jp/>



東京都少年 サッカー連盟

委員長
吉實雄二

広報
石神朋治



JFA全日本U-12サッカー選手権大会優勝のFCトリアネーロ町田

オフィシャルサイト
<http://www.u12tfa.jp/>



東京都女子サッカー連盟

委員長
大野博之

広報
横田景子



オフィシャルサイト
<https://www.jft-josi.jp/>



第1回目の緊急事態宣言の発令に伴い、東京都女子サッカー大会、レディースOver40大会、インターハイの東京都予選も中止になりました。2020年度に最初に開催できたのは、皇后杯東京都予選でした。6月中旬にスタートして代表チームを決定しないと関東大会に間に合わないという厳しい状況でしたが、無事に開催することができました。当初はコロナ対策の細かい指針がなかったのでどうすべきかと悩みましたが、なんとか消毒剤や非接触の体温計を購入して、日本サッカー協会が示したガイドラインとチェックリストを活用しながらの運営となりました。それを乗り越えて、8月からリーグ戦やU-18、U-15、Over30の東京予選が実施できました。コロナ禍で試合を開催すべきか悩むこともありましたが、選手にはサッカーを楽しんでもらいたいという強い気持ちがありました。感染者を出すことなく大会を無事に開催できたのは、参加チームスタッフ、選手、大会運営スタッフの皆さんが嫌な顔ひとつせず、多大なる協力をくださったおかげだと深く感謝しております。本当にありがとうございました。

また、あるチームの親御さんにコロナ陽性が出たことがありましたが、関係チームの選手に対する迅速なPCR検査対応や、細やかな状況報告をいただいたことで大会が無事に終了できました。参加チームのご協力なくして大会運営はできないと、改めて強く感じました。この経験は今後にも生かしていきたいと思っています。

2021年度に向けては、二回目の緊急事態宣言が発令されたことで大会延期や中断となった事業がいくつかあり、今後の不安は拭えませんが、なんとか予定した大会開催ができればと思っています。また、全国や関東に繋がる予選は日程が決まっており、それに合わせて試合をこなす必要があるため、それまでにはどうか感染状況が落ち着いてほしいと思っています。

登録選手のなかでも医療関係にお勤めの方が主体となっているチームは、リーグ戦も不参加になってしまうということもありました。そういったチームも今年はなんとか参加できる状況になればと思っています。

また、コロナ状況下ですが、女子選手の登録人数増加や女子サッカーの環境整備に、今後も女子連盟一丸となって取り組んでいきたいと思っています。

2020年度は、緊急事態宣言が発令されたことで、4月から6月までの活動をすべて停止せざるを得ず、スケジュールを何度も組み直すことになりました。フットサルは屋内スポーツということもあり、クラスター発生の危険性が高いと考えられ、施設利用の制限が厳しいこともありましたが、ガイドラインを作成したうえで感染対策を徹底し、また無観客で試合を開催していくということで7月下旬から活動を再開しました。実際に試合をする選手たちの心理的な面も心配でしたので、リーグごとに再開のタイミングを判断してもらい、8月上旬から順次再開していきましました。

この状況ですが、策を打ちながらリーグ戦を開催するということを目指し、その実現に向けて連盟・リーグ全体で一体感ができたと思います。現在でも、みなさんの協力があって開催できている状況ですので、大変な難しさを覚えています。

感染対策については、色々と情報集約し、自分たちに必要なアレンジをして、ガイドラインとマニュアル作成をしました。万が一感染があった場合でも最小限に抑えられるように、また、迅速に対応できるようにということを最大の目的としました。ピッチもサッカーより狭いため接触回数も多くなり、感染リスクが高いように見えるかもしれませんが、今回のリーグにおいては選手やチーム間での感染例が出ていません。ガイドラインも状況を見ながら常に更新していて、最新のものと対応をしていますので、今後も最善の対策がとれるように準備していきたいと思っています。

2021年度に向けて、東京オリンピックが延期されたことで、施設の使用状況がオリンピックモードになっており、会場確保は課題になってくるかと思っています。2020年度は最小限の試合数でリーグ戦を行いましたので従来通りの開催が出来る状況になることを期待していますが、すぐに戻すことは現状では難しいかと思っていますので、焦らずに様々な状況を見ながら適切な判断をしていきたいと思っています。

東京都フットサル連盟

専務理事
藤森雅義

広報
鶴岡洋祐



集合写真やチームベンチもソーシャルディスタンスを保つことを徹底した



オフィシャルサイト
<http://www.tokyo-futsal.jp/>



朝日新聞

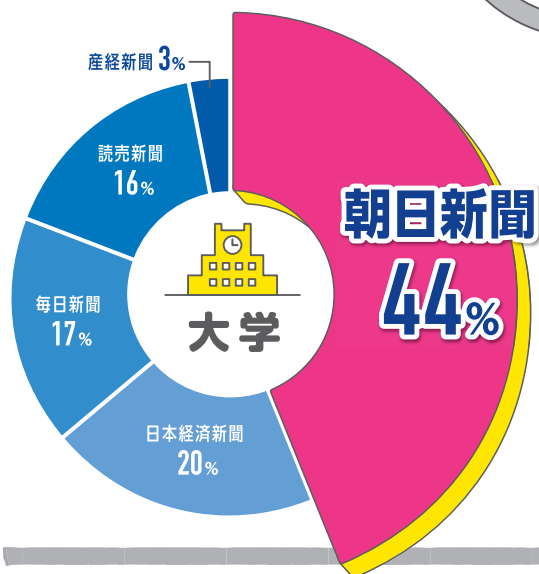
東大理Ⅲ(医学部)に
子ども4人を合格させた

佐藤 ママ

読むべきは
入試に出る新聞!!

佐藤 亮子 (さとう・りょうこ) 奈良県在住。津田塾大学を卒業後、私立高校で2年間の英語教師を経験。3男1女全員が東京大学理科三類に合格。子育て方法が話題となり、「『灘→東大理Ⅲ』の3兄弟を育てた母の秀才の育て方」(KADOKAWA)、「受験は母親が9割」(朝日新聞出版)などを出版。

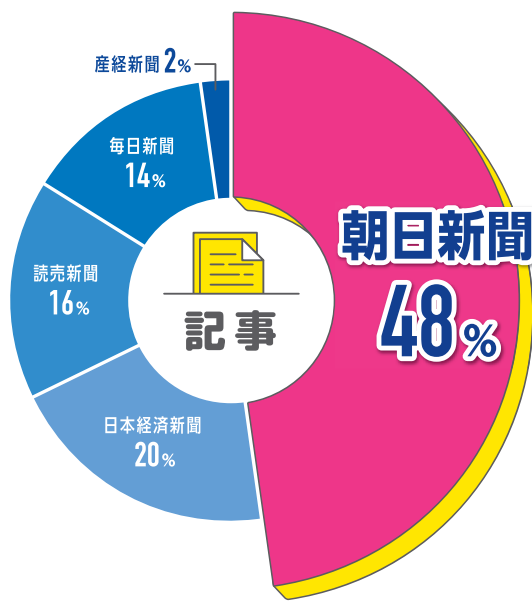
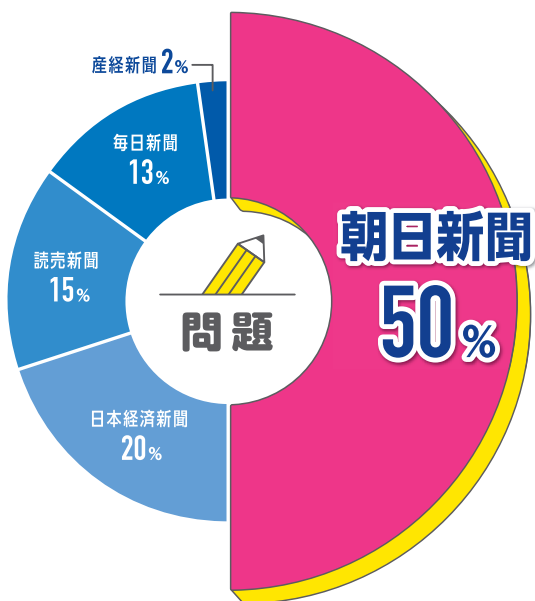
2020年度も
大学入試出題数は
朝日新聞が最多!



全国紙の2020年度大学入試出題実績

多くの大学の入試問題に朝日新聞の記事が登場。理系・文系を問わず、さまざまな学部や学科の入試問題で採用されています。

※大学通信調べ(2020年6月15日現在)。全国の大学にアンケート調査。対象は読売新聞(読売新聞オンライン)、朝日新聞(朝日新聞デジタル)、毎日新聞(デジタル毎日)、日本経済新聞(日経電子版)、産経新聞(産経ニュース)。回答数728。



朝日新聞のご購読は

<http://www.asahi33.com>